

コンテストは広がりを見せ、 「学校教育」にも採用

“誰かに贈る漢字を選ぶ”その時間は、
漢字そのものの奥深さに触れられるとともに、
自分の大切な人との関係を見つめ直し、
自分自身と向き合うことにもつながります。
その点が高く評価され、
学校教育の題材として取り上げられるようになりました。

今後、「大切な人へ漢字を贈る」ということが、私たちにとって
より身近な習慣になる日も近いかもしれません。



「どうとく3 きみが いちばん ひかるとき」(光村図書出版)

「漢字に思いをこめて」にこめた思い

私は、漢字コンテストの作品を読みながら、
「漢字って、こんなに表情豊かになるんだ——。」と、ワクワクしました。
「待」からは、「おかえり。」の温かさを感じたり、
「遊」からは、兄弟の楽しそうな笑顔が浮かんできたりしました。

私は、「教科書に掲載したい!」と思いました。
この題材なら、子どもたちが家族への思いを、楽しく、深く見つめられる。
この題材なら、家庭環境が一人一人ちがう子どもたちが、
伝えたい相手に思いを伝えられる優しい教材になる。
そう考えたからです。

授業を終えた後、
贈った漢字が、子どもたちと家族の宝物になればいいなあと願っています

光村図書出版 担当者